広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	人間の意識世界～「夢の世界」が「現実世界」を包んでいる～ ：上原輝男講義録④ 児童言語の研究（昭和59年度）より
Author(s)	宮田, 雅智
Citation	国語教育思想研究 , 29 : 58 - 61
Issue Date	2023-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053961
Right	
Relation	

人間の意識世界　～「夢の世界」が「現実世界」を包んでいる～
―上原輝男講義録④　児童言語の研究（昭和５９年度）より―

キーワード　言葉は「ことのは」　ロマンチズム　夢の世界

児童の言語生態研究会　宮田雅智

はじめに

これは講義ではなく演習です。『はなぢがナンでぇ』（1981年　童心社）に掲載されている子ども達の言葉からききとったことを学生が発表し、先生がそれに対してコメントをする、というスタイルでした。半期の選択科目で、主に３年生～４年生が受講していました。

今回は心意伝承や民俗学等々にあらわれている日本人の意識をふまえて子ども達の言葉に向かい合うことを総括的に述べている部分にしぼりました。講義内容としては第１回～第６回からの抜粋で構成しています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１，そもそも子どもとは何かをつかまえよ

大事なのは視座ですね。目を据える位置をどこにするかということ、どの学問をやるにしても大切だすけど、特に教育学をやろうとしている人達はこの視座を失っていると思う。教育の対象は人間に決まっているんですね。だけども人間ほど限定しにくいものはないんです。

今日の学校教育はすさんだ、歪んだ、やれ学校の教師は再教育をしなければならない、そんなことばっかり言っている。そうしてどこへ向かっていくかというと『教える』ということにばっかり向かっていくんですよ。そちらの方が恐ろしいことなんですよ。教えることにばっかり気をくばるようになっている。

まあ知育偏重なんて言われているからそれぐらいは諸君らもわかると思うけれども、大事なことは知育よりもっと大事なことがあると言うことなんかを世間の人達と同じように私は言いたいんではないんです。

その前に『教える対象の勉強をしなさい』ということですよ。つまり子ども自体の勉強をしなさいということですよ。子どもって何かということです。

所詮は人間の命題っていうのは継承以外はありませんよ。すべてがそうです。この役割しかはたさないんですよ、人間っていうのは。譲り渡しなんです。その点をもっと考えないと、老いも若きも考えないと。特に若いものがかんがえないと。いかに譲り受けいかに譲り渡していこうかと。その橋渡しを自分はしていると思う事ですよ。

年齢的な問題ではなくてね、実際に人間の子どもだとか大人だとか老人だとかいう捉えかたに問題があるんだということを考えなくちゃならんということだ。で、一番満足させる考え方は何かというとそれは人間というものはそれぞれ継承者でしかないということなんですよ。人生の傾斜で考えればみんな同じなんですよ。下の方はなだらか、上に行くほど険しいなんて、そんなことはないんですよ。みんな傾斜は同じところを歩いているんですよ。

２，言葉は「ことのは」

人生の糸紡ぎというのはこれは言葉にして覚えておいて頂きたいと思います。言葉というのはそういう役割もはたしているんです。内容はよくわからない、よくわからないけれども何か人生の糸紡ぎなんていう言葉がフッと何かを考えさせてくれるな、なんていう為に我々は言葉といっているんです。

人生の糸紡ぎなんていうのは『ことのは』にすぎないんです。人生の糸紡ぎでその内容をすべて言い当てているわけではありません。何かを思い出すきっかけを人生の糸紡ぎと言っているんです。それが『ことのは』の役割なんです、一つの。

皆さんが。おそらく今日、強烈に『人生の糸紡ぎ』という言葉が残ったとしますよね、そうすると「私は大学４年間であんまり勉強しなかったけれども昭和５９年４月２６日、忘れもしない、あの四百何番かの教室で上原先生が人生の糸紡ぎって言った、あの言葉は強烈なんだ」こういって残るわけです。そして「以後私は人生の糸紡ぎを紡

ぎだしたんです」なんて。

だから消えない為にその『ことのは』を書き記しておくんですよ。だから自分のノートっていうのは自分の言葉で書く必要がある。

私の仕事っていうのは人生の糸紡ぎ、それを人間に確認させていく、あるいは自分自身が確認していく、そういう方向で書物を書きたいとどっかで思っているんでしょうね、こういう言葉が出てくるわけですから。

あのね、私ぐらいの年代が持っている言語観と、若い皆さんが持っている言語観とでは相当な隔たりがある。そんな風に思います、長く生きていると。随分違うなと思うことがある。それはね、額面通りに皆さんは受けとめる。そういう言語観を持っていらっしゃる。

言葉はつかったらつかった通りにつかえているなんて絶対人間は思っていない。それは一部にすぎないと思っている。それが日本人の前にも申しました「言葉」なんです。事実は「こと」にある。言葉というのは、それの上辺。言葉っていうのは実態の外まわり、「は」なんです。出たところなんです。だからその言葉を遣うことによって何を言いたいか、すべてを言っているかどうかは分からないというつもりでつかっているに過ぎないんです。表面をちょっと言ってみただけなんですよ、言葉っていうのは。それが「は」なんです。端っこなんです。

特に幼児の言葉なんてすべてが言い尽くされているなんてちっとも思っていません。

これが日本人の感覚なんです。「葉」「歯」・・・チラリと見えたものなんです。こういうところに日本人は素晴らしさがあるんです。

よく似たのが「ほ」なんです。これもチラリと見えたものなんです。「はひふへほ」はみんな実態ではないんです。

3，教育者の役割

教育学っていうのはロマンチシズムだよ！間違えちゃいけない。教育学っていうのはロマンチシズムですよ。夢を描けというのとはちょっと違うよね、私の言いたいのは。人間はいかなる感覚のもとにこの世の中をどう見ようとしているのか。「見果てぬ夢を見る」っていう言葉を使うでしょう、それがみんな人間の想いなんですよ。だから教育学をやろうとしている人たち、教育者はロマンチストでなくちゃならんのですよ。諸君らが教壇に立とうというのはチーチーパッパやってね、「そこ読んでごらん」「ハイ足し算引き算やってごらん」そんなことじゃないんですよ。

私は何のために諸君の前に現れたか、諸君の心の胸の火を消さないように、燃え盛らせるために先生はあの世からやってきた、と言わなけりゃならんのですよ。あの世からとは言わなくてもいいけどね。

そうでしょう。我々は案内者なんですよ。水先案内人なんです。案内人っていうのはいつでも杖をついていくんです。これも折口学だけどもね。杖をつくっていうのは旅人である、っていうんですよね。あの世からやってきたと先ほど私が言ったのはそういう意味です。旅をしてきたんですよ。そしてこの世の人たちにあの世へ送り届ける仕事をするんです、我々は。

だから我々は同時に宗教人なんですよ。ペスタロッチだけが宗教人ではないんですよ。隠者の夕暮れを書いたペスタロッチだけが隠者ではないんですよ。我々が隠者なんです。この世に住まいながら我々はこの世の人間ではないんです。そうでなくちゃいかんですよ。そして我々の仕事っていうのはこの世の人をあの世へ送り込んでいくんだって。そうでしょ。「先生ありがとう、私迷わず冥土へ行けます」っていうことをさせているようなものじゃないですか。そうでしょう。チーチーパッパの先生なんて・・・。本当にしっかりしていかなけりゃならんですよ。

先生がもしその子にとって生涯忘れることの出来ないような何か感銘を刻むようなことが出来たらその子は幸せなんだもん。そうでしょ。「チーチーパッパしかあの先生は教えてくれなかった」って言ったらどれくらい不幸かっていうことですよ。子どもにとって。自分があたった子が幸せになるか、自分があたった子が不幸になるかなんですよ、我々の仕事っていうのは。そうでしょう。私がそこの学校に行かなかったら誰か行くに決まっているんですから、公立学校なんですから。

4，現代人にとっての『夢の世界』の意義

我々も考えてみましょうね。「現実と夢とは違うんだ」とよく言いますけれども、本当ですか？

皆さんもある時期までは現実と夢とを区別してきたでしょうけれども、もうボツボツまた子どもに帰って現実と夢とのつながりを考えてみる段階へお入りになった方がよろしいかと私は思いますね。そちらの方がより高度な生き方ができると私は思いますよ。「自分の考えていることは夢なんだ。現実にはなかなか相容れてくれないんだ。現実は厳しいんだ」なんていうのはある段階でしかないんではないでしょうかね。

実際に我々は現実に生きているんでしょうか？現実に生きているんでしょうか？我々が現実に生きているのは「実感」においてだけ生きているんですよ。

そちらの方がより確かなんですよ。私たちは世間のつながりや人間関係を持って生きていると思う、そしてそれが現実だと思っている。しかしそこに自分を見出すと言うのは大変苦労なことですよ。よく言うじゃないですか「世間のおつきあいは義理がかかって大変だ」って。「わずらわしい」なんて言っているでしょ。そこには自分はいないんですよ。極めてパターン化された生活様式があってそこに自分は乗っかっているだけなんですから。本当に現実というのはそうなんでしょうか？

その本人にとっての現実というのは。自分を本当に住まわせているのは夢の世界ではないですか？いつまでたっても。私を一番心休まるように住まわせてくれているのは現実と離れたところにそれぞれの人がいらっしゃるのではないですか？

だいたい我々がこの世をおさらばする時にね、「俺は長い夢をみていた」と言って我々はおさらばするんじゃないですか。豊臣秀吉だってそうでしょ。「難波の夢は夢のまた夢」って言って「サヨナラ」ってしたんじゃないですか。「ああ、今初めて夢から覚めた」それから死んであの世へ、って言うんでしょ。みんな同じ想いをしているんじゃないですか？そうするとこの世に生きているとは夢をみるために生きているんですよ。

これも自然科学に人間が破壊されているからなんですよ。そういうことが思えなくなってしまったんですよ。自然科学に破壊されていなかったら我々はもっともっと楽しかったはずですよ。夢をみて過ごせたからですよ。どうして夢をみて過ごすことが悪いんですか！それしか見られないんですよ、人間は。現実的に生きるとはどういうことですか？でしょ。現にお付き合いだけで我々生きていけますか？

もう皆さんは次の夢時代に入って欲しい。特に教育学をやる人たちでしょ、あなたがたは。私は教育学をやる人は絶対ロマンチストでなければいけない、っていうのが私の信念ですから。

ロマンチズムっていうのは滅びるんです。これは私、昔からそう思っていた。ロマンチズムは成功はしないんです。どこの歴史を見たってロマンチズムは破れるんです。でもこうも言えるんですよ。「破れるからロマンチズムなんだ」って。「僕がこの世に描こうとした教育における夢は俺は何も果たすことはできなかった」って。私は悲しくまたこの世を去っていく・・・それでいいじゃないですか！それが言えれば素晴らしいことですよ。それが私は教育科の学生でなければならないと思う。小原國芳が「夢夢夢夢・・・」って書いているのは何の夢か、何の意味だったのか。「学校の先生は夢を大きく持ってください」・・・そんな意味で書くんだったらとっくに札幌時代で終わっているじゃないですか。「少年よ大志を抱け」って。そういうことで「夢夢夢夢」って書いたわけではないんですよ。もう少し高度な意味で捉えてほしい。

人間は夢を見なければ生きられない動物なんですよ。夢を見ていこうとするものですよ、本来。それぞれが夢を見ているんですから。

子どもたちの夢に関する発言をとって、そして夢の分析をするのも素晴らしいことですね。そういうユニークな論文を書いてください。卒業論文を。書けないことはないです。「子どもにとって夢とは何だろうか」って。

現実と夢とは今の現代の人から言わせれば「混同している」と、こう言っているけれども、さっきの私の話では「混同して当たり前なんだ」と。混同と言っていいかもわからないよ、もっと交流していいんですから、「夢と現実」とを。

我々がこうやって話をしていることだって、ここで講義をしていることだって皆さん方の現実に私が語りかけているわけじゃないでしょ。皆さん方の夢を作るために私は話しをしているんですよ。そして私は現実的にしゃべっているのではなくて私の夢の出るところを話しているんですよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

解題

講義録内の　4，現代人にとっての『夢の世界』（イメージの世界）の意義に関して、このような先生の言葉もあります。

＊忙しい現代人は現実世界だけでボロボロになっている。　昔の日本人の方がイメージ世界が大きい。だから現実に立ち向かうこともできた。』

（平成六年四月例会）

＊現実いっぱいの子ども達は「壁にぶつかった」そうしたらこの壁を抜けないですよ。だけどイメージ力のあるやつは突き抜けていく。現実の時間・空間とは違う世界に入っていけるんですよ。『ああ、この子は新しいイメージの世界に入ったんだ』と、これでいいんですよ。・・・だから人間ってやつはいつでも時間・空間の継続と裁断を行いながらイメージを展開させているわけ。

（平成七年合宿）

＊（四年教材『たかのすとり』について）

・・・最後子ども達が帰るときに「アッチー」って言って笑いながら帰った、というところですよ、大事なのは。つまりね、怖い思いをしたわけでしょ、それを、最後「アッチー」ってやったことで『楽しい思い出』にしてしまったんですよ。怖い思い出を『楽しいイメージ』のオブラートで包み込んでしまったんですよ。そうして『楽しい思い出』として心にしまいこんで家に帰っていった、そういうことでしょ。イメージにはそういう働きがあるんです。これが『子どもの持っているたくましさ』だったわけですよ。

（昭和六十二年五月例会）

上原先生は「英才児」に深い関心を寄せていました。それは単に知能が高いということよりも、この現代社会の中でも夢の世界との共存や、②の解題でふれた江戸庶民の発想法をずっと持ち続けていることにもよるようです。

無論、夢の世界（イメージの世界・ファンタジー）は現代人も持っています。ただ、かつてと違うのは現実の世界と陸続きではなく、デジタル思考的に完全に分離している場合が多いということです。それが大人になってもの引きこもりなどにも表れているのだと考えられます。

日本人が物事を認識する場合、二者択一ではなく相反することを統合して考える、両者の間のグレーゾーン、そしてその向こう側に目にはみえなくても広大な世界があるという前提でした。「言葉は　ことのは」ということから考えても言語化できない部分こそ実体としているわけです。ところが現代人は白黒はっきりとつけなければダメという思い込みが非常に強くなっています。それに拍車をかけているのが最近の、特にネットにはまっている若者によくみられる「額面通りにしか言葉も物事も受け止めない」「好きな音楽や映像作品でさえ、早送りで鑑賞する」という風潮です。表面的であっても知っている事実さえあればいい。なので分からないことは自分で考えてみる前にすぐにスマホなどで検索をして鵜呑みにしてします。ネット内に答えがないと、もうそれ以上考えることは放棄します。こうした風潮を生んだ大きな要因の一つに「すぐに間違えずに大人の期待する反応ができる子がいい子、できない子は負け組として脱落させられる」という扱いを幼い頃から受け続けてきたことにもあると思います。過度の競争原理・成果主義からの歪みです。

言葉として表れていないものを感じとることが日本人の最も優れた感覚だったわけですが、そうした力は未開発のまま大人になるので、当然先生が語っているような夢の世界が現実対応にも力をかしてくれるということは期待できません。日々ますます廃れつづけてしまっています。

子どもの言葉と向かい合う際には、それこそ上原先生のような多岐にわたって人間生活を探求する姿勢が不可欠です。日本人の特性が生活上の様々なところに反映しているように、子ども達のさりげない言葉にも無意識に表出しているわけです。イメージ作文や創作文で大人からみてわけのわからない事、反教育的に思えることを書いた場合などは特にそうです。案外心意伝承が潜んでいます。それを大人が察することなく完全否定することはその子どもの根の部分を壊していくことにもなりまねません。

それをキャッチする感度をあげることは、教育に携わらない人たちにとっても「生き様、人間同士の交流」の上でも、大切なことです。感覚が伴った知識は、個人の想定の枠を超えた広大な世界に誘ってくれるライフインデキスだからです。

『日本人の体質にあった言語生活を普通に取り戻すこと』これが上原先生の思想を現代に広め、後世に残していく大きな意義です。